

ブロイラーの肉質改善に関する研究 (東京都におけるシャモの飼養状況調査)

殿内正芳 清水明良 宮下光男

1. 目的

鶏肉の生産は近年その主体をブロイラーの生産によって行なわれるようになって来たが、その肉質はきわめて淡白であって、従来の鶏肉に比較するとその味はいわゆる「こく」がないため、ブロイラーの肉質改善への要望が高まってきている。このために日本古来より飼養され食鳥の代表であった軍鶏により肉質の改善を図り、より日本的な食用を生産するためブロイラー産業を育成するとともに近年飼養羽数が減少し一部の愛好家によってわずかに保存されている状況と思われ、このため優良系統の軍鶏の選抜、改良を通じてその特性を維持向上させつゝ肉鶏としての基礎的な各種の事項を究明し、ブロイラー鶏種の改良の基礎となる品種を確保改良するために都における軍鶏の飼養の実態を把握するために本調査を行なった。

2. 調査方法

軍鶏(普通専鶏以上)は一般に人目をさけて飼養しており、また飼養同好者を教えることをしないのが建前のものであるので飼養羽数の多い愛好者に接近しその影響力のある範囲を知り戸別に調査しながらさらにその関係者を知る方法をとるとともに、また日本鶏愛好者による会の組織(秋川日本鶏保存会、全日本矮鶏保存会、小型軍鶏保存会、八王子禽友会、東京都愛鳥友の会)を通じて調査し地域別に羽数を集計し、飼養管理、育種、軍鶏舎等についてはその中の多羽数飼養者について現地において調査した。

(1) 調査場所

- ア 小平市小川町
- イ 国分寺市並木町
- ウ 国立市谷保町
- エ 秋川市野辺町
- オ 青梅市千ヶ瀬町

3. 調査結果

(1) 東京都における軍鶏の飼養羽数と現状

東京都における軍鶏の飼養状況は、二つの流れによって互に交流しあっている。そのうちの一つは日本鶏保存会とか協会の名称のもとでその会員中で愛好者によって少羽数(二羽番

か三羽番)程度の飼養である。これらの会員は軍鶏のうちでも小型軍鶏の飼養が多い。その二つは会に所属することなく独自の愛好により飼養している人々である。これらの人々が相互に交流しあって近親の弊害を防ぎながら繁殖、維持しているのが現状である。

組織としては公認の全日本家禽協会(会長 加藤遜後氏)があるのみであとは申合せの会で、秋川日本鶏保存会(会長 森田常司氏)会員50名、またチャボ保存会から分立した小型軍鶏保存会(会長 玉居子幸七氏)、東京都愛鳥友の会(会長 中谷勝二氏)等がある。

地域別はその飼養をみると、どの地域にあっても1戸の飼養羽数は二羽番または三羽番程度が主体で特殊愛好家になると100羽程度飼養している特別のものもある。

飼養戸数、羽数については飼養が少規模で調査に入らなかったものもあると思われるが会員組織と同好者を中心とした、いもづる式調査では区内142戸・1556羽。西多摩地域30戸・180羽。南多摩地域32戸・251羽。北多摩地域16戸・340羽で、小型軍鶏は愛玩用であり、普通軍鶏は特殊の愛好により飼養されており食肉を目的として飼養しているものではないが都内において軍鶏肉を年間1000羽の生産目標にして飼育場を都外に持って飼育に心がけるものもある。

地域別飼養羽数は、表-1のようである。

表1. 地域別軍鶏の飼養羽数

地域 品性 種	区 内			西 多 摩			南 多 摩			北 多 摩			合 計		
	雄	雌	計	雄	雌	計	雄	雌	計	雄	雌	計	雄	雌	計
普通軍鶏	1010	468	1478	95	56	151	165	69	233	232	97	329	1502	689	2191
小型軍鶏	45	33	78	13	16	29	8	10	18	4	7	11	70	66	136
計	1055	501	1556	108	72	180	173	78	251	236	104	340	1572	755	2327

(2) 調査事例の概況

調査場所は普通軍鶏を主体として蕃殖し愛好家に販売している事例は、ア.ホ。

自己の特殊愛好のために蕃殖し同好者に譲渡している、イ.ウ.エであってお互いの間は直接または間接に交流が行なわれているし飼養管理の状況は大差がないので各調査事項を総括的に記載する。

ア. 品種、普通軍鶏、赤笹系統が大部分で、小羽数淡黄・黒・白系統の混飼がみられた。調

査事例 エ オ.

1. 個別飼養数

調査事例	ア	イ	ウ	エ	オ
雄	50	50	40	50	20
雌	20	20	20	20	10
計	70	70	60	70	30

ウ. 鶏舎構造 (別表)

エ. 飼養管理

(ア) 育成管理

現在の軍鶏の用途は主として闘鶏用であるために種鶏として使用している鶏は闘争に強い鶏を生産した父母を長年にわたって飼養している。また闘争も、四ツ相撲型、前蹴型、バック攻撃型、横げり型等、闘争の性格も速攻型、遅攻型の好みも愛好者によって異なるがそうしたなかにあつて闘争に強い仔を生産した鶏が種鶏として飼養されている。これは調査場所全体(ア～オ)の傾向である。

事例 アは県外主として秋田県より大型鶏や、闘争性のみならず軍鶏の外型特徴の良いことも目標にして繁殖を実施している。

ふ化については他の調査場所においても同じであるが駄矮鶏を飼養して母鶏ふ化を行っている。

育すうはそのまま母鶏による育すうと育すう器に取りあげて電球による保温により人工育すうを実施している。

育すう箱はさまざまであるが、70cm×90cm前後の箱に温源部と運動場の間を「のれん」で境をして温源は40～60Wの普通電球を使用している。保温期間は季節天候によって異なるが床面の乾燥を図ることをねらいとして比較的期間にわたって保温している。平均6週間程である。

一般的の管理は採卵の場合と同じようであるが雌は必要羽数を残してあとは早期に淘汰している。闘争による事故死亡に対しては色々と苦勞しているようであるが、二週令

頃より闘争が始まるがその頃は遊戯的であって死亡に結びつくことはないが、四週令以降になると死亡に直結してゆく。したがって闘争により傷ついた個体を一日隔離すると顔面が腫張してくるから、こうなった個体を同一室内に收容することにより啄くことの痛さを知って啄くことがなくなる。またさらに期間が過ぎてからは他の鶏種を啄かれ鶏として混飼する等の方法によりでき得るかぎり集団飼育の出来得るようにしているが大すう期～成鶏期に入ってから雄は個別飼養している。個別飼いは軍鶏舎ア～オ、籠飼いう、である。

雌は種卵の採種期には1雄に3雌程度を配雄し、採種しない時期は別飼している。多くは舎飼い(ア～オ)または放飼(ア・オ)であるが別飼期には飼養鶏の一部であるがケージに入れている場合もみられる。事例ア・オ。

事例アの鶏は他の調査場所イ～オまで入っているし、また逆に直接、間接にアのところへも入っている。

事例オは中すう期より放飼している。放飼している場所が広いいためか闘争死は少ないようである。

軍鶏舎に收容されている場合二階建軍鶏舎の場合は下段は成鶏で上段は中、大すうを收容している。事例ア～エ。

委託育成もさまざまな状態において行なわれている模様である。

(イ) 成鶏管理

成鶏管理に特異点は闘争のトレーニングである。これは日令300日頃より始める。嘴、距をビニールテープ、布等で覆い傷害が起らないようにして行ない、トレーニングの時間は10分程度より始め、体調に充分注意しながら次第に時間を長くしてゆき30分行なって15分休み30分行なう。トレーニング前に飼料を与えない。トレーニング後は顔面から口腔食道等を水洗いする。これをおこたると粘液が充満して以降健康を阻害する。雄を收容している舎は隣室が見えないように目かくしの板をし、闘争を起さないようにしている。

距(蹴爪)の管理は交配期には雌の外傷を防止するために鉄鋸で切断し周りにやすりがけして円くしている。切断の初期は距の発育して1cmの頃に行ない、以降伸びてきた部分はまた切断している。

(ウ) 産卵性能

産卵能力は個体差が甚しく、また卵重差が多く、産卵は春が主で、就巢の発現で一時停

止産卵を繰返して休産に入るがその産卵数は明らかではなかった。

(エ) 飼料

幼すう期はチックフードを使用しているが、以降の飼料はさまざまであり大すうから成鶏では穀類を主体とした、青米、とうもろこし、緑餌を給与している、採卵鶏の育成から成鶏までと同一飼料を給与してゆくとの脚の弱い鶏になるという意見が5例ともあった。飼料の事例別給与方法は次表のようである。

事例別飼料の給与方法

事例 期別	ア	イ	ウ	エ	オ
幼すう	チックフード 練 餌	同	同	同	同
中すう	20日以降3ヶ月	採卵鶏中すう飼料 に適宜青米とうも ろこしを混合して 給与	左に同じ	採卵鶏中すう飼料 に小麦・とうもろ こし・青米を混合 して給与	青米・とうもろこ し・川魚を混合 して給与
大すう	豊橋、成鶏用粒飼	左に同じ	左に同じ	大すう飼料に同上 混合	大すう飼料に穀類 川魚を混合
成 鶏	同 上	同 上	同 上	成鶏飼料に同上混 合	成鶏飼料に穀類混 合
備 考	ブロイラー飼料の 給与は中すう期の 発育増大を目標と している	基礎飼料に穀類の 配合割合は明確で ないがその時の状 況により異なるよ うである	左に同じ	穀類が多い時は川 魚の乾燥物を混合 する。明確な給与 区分飼料はない	幼すう期以外は穀 類を主体として給 与しているがはっ きりした期間的給 与区分はない

上表のように幼すう期はチックフードを練餌で給与しているが、中すう期以降は青米、とうもろこしの主体飼料を給与している場合が多いが、明確にその配合割合や給与期間等はわからないがいつれにせよ飼料の入手の状態鶏の状態により適宜給与してへるようと思われる。はっきりとした方法を行なっているのは事例アのみである。産前産後における飼養等もそれぞれの方法が行なわれているようであるが、その主体飼料は青米のようであったが明確に聞き出すことは出来なかった。

(オ) 衛生

鶏痘、ニューカッスル病の予防はそれぞれ5ヶ所ともに予防接種を実施していた。ニューカッスル病については採卵鶏より弱いように思うと言っていた。ア、エ。

特殊な鶏であるだけに環境の清掃は各戸ともに良い状況にあった。ニューカッスル病の予防接種のプログラムにしたがって行なっている訳ではなく周囲の発生状況によって実施しているようである。イ、オアはひなの時期と夏と冬の三回実施しており、接種量も採卵鶏より体重があるから倍量を接種している。

むすび

ブロイラーの肉質改善を軍鶏を利用して行なうべく、その基礎鶏を導入するためと都における飼養羽数、飼養の実態を知り今後の試験飼育の参考資料を得るために調査を行なったが、飼養されている軍鶏は分類上では普通軍鶏であって、大軍鶏は僅かに存在しているが、中軍鶏はみられず、小軍鶏は観賞用として飼養され、普通軍鶏とはその飼養グループが異なっている。

羽色による分類は、赤笹系統と黒が主体であって、浅黄が僅かにみられたが、元来軍鶏は闘争が目的とするが故に羽色については白色が嫌われるが他の色については余り考慮されていないようである。

羽毛量については古来の軍鶏は咽喉下部より羽毛疎となり皮膚が裸出するものを多く見かけたが近來の軍鶏（調査時点における）はそのような個体を見ることはなく、闘争目的から羽毛量を増し、傷害の予防を無意識のうちにそのような方向に向かったものではないかと思慮される。

産卵性能等経済的諸要因になる事項については、ほとんど適格の回答は得られなかった。

観賞用、あるいは闘争用として飼養されている関係もあるが、日本古來からの鶏類が外貌的な面の調査はあってもその他の面の調査は少なく、次第に減少しつつあることは、古來より飼養され文化財として現代に引継がれた貴重なる遺産が民間の特殊家により僅かに維持されていることは誠に心もとないことで、今後一層各種の事項について調査研究の必要を感じられた。

3. 調査結果 (2)

ウの別表

軍鶏 鶏舎構造

柱 角材 2寸

板 4分板

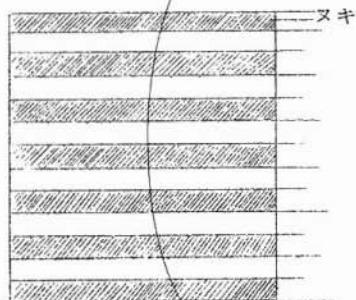
ヌキ 0.5 × 3寸

前面は 0.8 × 1寸の小割

屋根材は派型トタン

平面飼養舎

ウラ面

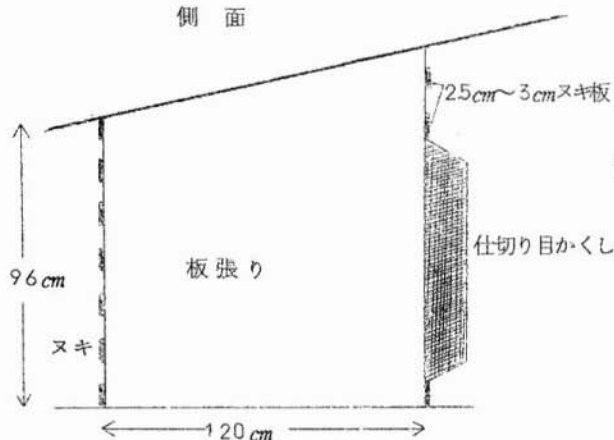


床面は土間

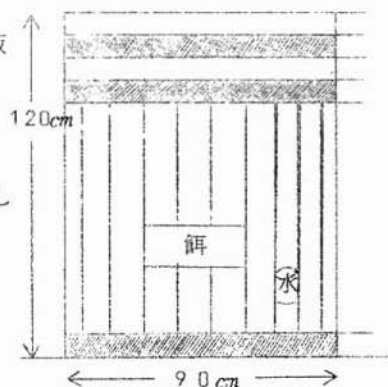
調査場所 番号と飼養方法

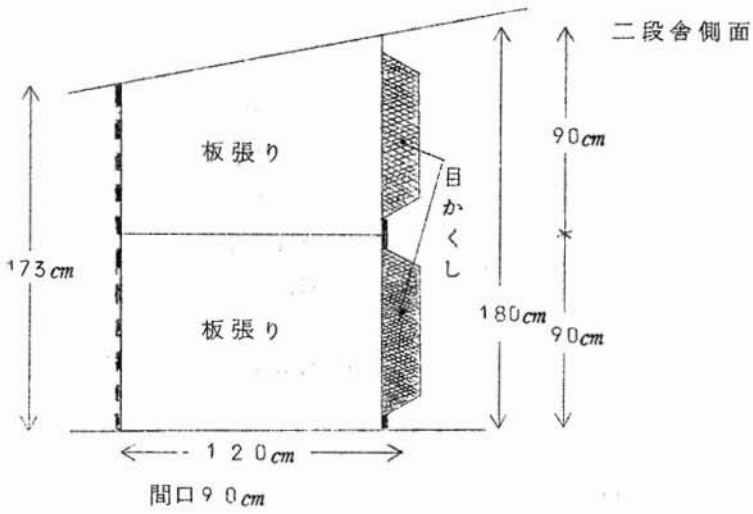
- | | | |
|---|---------|-----------|
| ア | 平面と二段飼養 | 雌は放飼 |
| イ | 平面と二段飼養 | 雌は放飼 |
| ウ | 平面と二段飼養 | 雌は放飼 |
| エ | 平面と二段飼養 | 雌は山林に放飼 |
| オ | 平面飼養 | 雌は単飼ケージ飼養 |

側面



前面





前面の構造

